

連続講演会 1

祭のあるまち・まちづくり

講師：増井正哉

日時：平成22年11月7日（日）

会場：八木地区公民館

はじめに

私自身、八木については調査をしたことがありましたし、NPO のワークショップで発言したこともあります。ロケーションが良いところですし、造りものも楽しそうです。この講演は是非とお引き受けをしました。

「祭りを活かしたまちづくり」ということですが、実は私はもともと建築の保存の人間なので、かなり街並み景観に特化した、つまり「建物の保存」とか「街並みにあった建物のデザイン」といった話になって、本当に祭りが好きでそれを活かした街づくりを考えるということからは少しテーマ逸れるかと思いますが、こういう見方もあるのかなという感じでお聞きください。

私は国内では伝統的建造物群保存に関わるのが一番多い仕事で、最近では、2008 年から 2 年間今井で伝統的建造物群保存地区の見直しを手伝いました。その時に、八木のことも考えました。今井と八木では、コントラストがあって、まちづくりの可能性、方向性もそれぞれ違うし、違っていきべきだと思っています。

この間、JICA の研究生を連れて、今井と八木を比較するようなことをやってみたのですが、それぞれの生き方に特徴がある、みんなピンとくるころがあったようです。NPO さんの活動もターゲットをそういうところにおいておられるのかな、というような気がします。

祭りとまちづくり

私はもともと建物の保存とか、まちなみ景観の保存にたずさわってきましたが、あるきっかけから、祭りとまちなみ、あるいは祭りとまちづくりに関わっていくことになりました。私が京都大学にいましたとき、京都の杉本家という建物の保存の話があり、初めて祭りと建物はすごく関係があるのだということに気がつきました。

それまでは、祭りは直接的に面白いとは思っていましたが、それがまちなみとか建物保存とか、まちづくりに実は大きな役割を果たす、ということの実感はなかったのです。

杉本家住宅



ご存知かと思いますが、杉本家住宅というのは四条烏丸から徒歩 5 分くらいの所にあります。明治 3 年くらいの建築なのですが、おそらく最大規模の町家だと思います。それがあつた時に御当主が亡くなつて、もの凄く額の相続が発生しました。実はここの御当主さんは杉本秀太郎さんという方で、フランス文学の先生です。その先生がここの相続をすることになってしまいました。1989 年はバブルの真っ盛りで、京都の地価がどんどん上がつていった時期です。相続税をキャッシュで 6 億円くらい払わなければいけないというようなことになつたらしいのです。当然一番良い策はお金に換えることで、6 億円の相続税を払つたとしても手元に何億かの金が残りますので、杉本先生としては凄くプラスになると思います。杉本先生は京都の文化人のサロンにおられまして、私の師匠である

西川幸治先生と知り合いでした。杉本先生は遺産相続権を放棄して、財団法人化されました。つまり、手元にいくらかお金が残るのを放棄して実はこの建物を残し、杉本家保存会とされました。杉本先生は、自分の財産をなげうって京都の町のためにこの家を残したのだ、とおっしゃったのです。杉本さんが自分の財産をなげうって京都の町に貢献したのだから、京都の町は杉本先生に貢献しなアカンと思ったわけです。不思議な論理ですが、なんとなく分からないでもない。「貢献せなアカン」というのは、どういうことかと言うと、この周辺の町並がこの杉本家にふさわしい町並になっていくことだ、ということです。つまり一軒の建物が残ることによって、周りがそれにふさわしいようになっていかなアカンということです。このような不思議な論理を西川先生に言われました。そして、その鍵は祇園祭である、ということをおっしゃっていました。祇園祭に「伯牙山(はくがやま)」という山鉾が出るのですが、その山鉾の飾り物を杉本家に飾る、つまりお飾り場「お飾り場」に使う場所なのです。それがこの杉本家住宅の価値を明らかにする重要なキーだから、「お前、祇園祭の研究をせい」、と言われました。つまり、京都の町が杉本さんに貢献するためには、周りの町並がふさわしいものにならなければいけない、あるひとつの町並で財産をなげうって保存したいという物件が出たときには、周りの町の人々が、意気込んで建物を残してくれる人たちにはそれにふさわしい町並をまわりに作っていくというのが町の義務だと、西川先生らしい独特の論理でした。

祭と地上げ

私自身は祇園祭の研究をするのは嫌でした。当時、様々な研究グループが京都の町中の町家を残していくには、どのようにすれば良いのかという問題に真剣に取り組んでおられました。皆が相続税の問題、町家の耐震性や防火性の問題を議論している時に、祭りの調査ですといって京都の町家に入

っていくのはなんとなく引け目があったのです。すごく嫌でした。「お前らふざけてるのか」、と追い出されると思っていたのです。

ところが実際調査に入ってみると、地上げが迫ってきて大変な居住環境にあるなかでも、京都の町中、とくに町用人と言われる人たちがこの祭りを大事にしているということが分かりました。逆に調査のやり甲斐もあるなと思いましたが、ある人に祇園祭というのは奥が深いから手をつっこんだら大変なことになるよということを言われました。このように山鉾巡行があり、わーつとにぎやかに人が出る、これが京都の祇園祭のイメージですね。実は、私自身山鉾巡行を見たこともなかったし、夜店で皆でわーわー騒いで、女友達と浴衣を着ていくところだったのです。それがどうも歩いてみたら、そんなことだけではなく、町家にこんな飾りをしていて、建築の目で見ても面白い祭りだなと調査を通じてだんだんと分かってきました。これも祇園祭のイメージで、ふと歩いてみたら、このような山鉾巡行がずっと行われている、実は皆山鉾の方ばかりみていて、鉾のデザインがどうだこうだといいます。ガイドブックでもある時期まではほとんど飾り物を紹介していました。しかし、ふと京都のまちなみと山鉾という視点から見ると、なんとなく後ろにそびえている建物だとか、あるいはこの町家と外の関係だとか、いろいろ建築的な観点から考えなければいけないことがあるというのが分かってきました。

祇園祭の夜は、それまでは夜店ばかり見ていたのですが、町家を使って自分の家宝の屏風飾りをするとか、提灯を使って、このようにちょっと飾りをするによって町並がぐっと魅力的なものになっていく。図と地で言いましたら、地になるこういう建物とかまちなみ、町家と祭りは、密接につながっているのだなということが分かってきました。

スペシャルプレゼンテーション

そしてこのような空間様式にスペシャルプレゼンテーションといった訳語をつけました。35ヶ町の全部の飾り物の会場になっているコミュニケーションセンターのような建物を図面化してみました。そして、通りに面してどんな提灯がかかっているのかとか、どんな夜店が出るのかとか、ということを全部調査しました。こういう分布図を作って、代表的なところは連続立面を作りました。そうすると、祭りというのはわーっと成り立っているのではなくて、実はこの建物とか、通り、例えばこの通りがあったらここにシンボルになる山鉾がおかれて、その周りに提灯などの飾りが置かれて、お家によっては幔幕がかけられる。そういうことによって祭りの空間が出来上がっていくのだというのを実感しました。

これらの調査は、鳴海先生が京都の中でずっとやっておられたトレースみたいなのがあったのですけれど、空間づくりと関係があるのではないかと思います。

これだけではなくて、実はいろいろな装置がこの中に組み込まれていまして、例えば道路を歩いていますと、かっこいい丸や四角の石がポンポンと地面に埋め込まれている。それは山とか鉾を建てる場所なのです。へんなへこんだところがあるのですが、それは山立てとって、山を起す時にウィンチを差し込む穴だったり、そういう仕掛けみたいなものもたくさんあるということがわかりました。

京都の祇園祭の山鉾巡航のスタートの時に、しめ縄切りというのがあります。先頭の長刀鉾に乗っている稚児さんが道路に張ってあるしめ縄をポンと切る行事です。しめ縄がどこにあったかという、道の両側にある竹から張ってあったんです。そしてその竹を埋め込む穴が通りに既に空けられていて、そこに差し込む。ある時道路工事で穴がなくなったとえらい騒ぎになったりしたこともあったそうです。そういった仕掛けが都市空間に組

み込まれているというのが分かってきました。祭りとまちなみの関係が分かりやすくなったので、これで調査は終わりかと思っていました。

しかし、「京都と似た町や祭りがあるでー」と言う人がいまして、ご存知かと思いますがこれが滋賀県の大津で、祇園祭と大変よく似た祭りをやっていたので、面白いから調査しようということになり、それがきっかけでずるずるとあちこちを調査するようになりました。

その他の祭

これは岸和田です。だんじり祭りと言えば、威勢のよい祭りにという印象もありますが、実はこういう上品なものもあります。

他にもあちこち行ってきましたが、かざりものが面白かったです。上の方は新しい祭りで、下の方は伝統的な祭り。上は地元出身の絵師さんをテーマにした屏風飾りの祭り。怪奇絵とか怪談絵ばかりを描いていた絵師が江戸時代にいたらしいです。首がばーっと切れて血が出ている、おなか割れてる、そういう気持ち悪い絵ばかりです。夜にその絵の屏風を飾って、ろうそくの光でゆらゆら絵が揺れている、このような気持ち悪い祭りをかんがえる人がいて、すごく楽しかった。大阪の平野も、けっこうお付き合いが長かったです。

これは富山県の城端ですし、これは富山県の八尾ですね。このようにお祭りと町並が関係づけられているようなことが全国にあるというのが分かりました。これは、今問題になっている鞆の浦ですね。町並の中にこういうちょっとしたスペースを使って、つくりものを作り、パレードもあります。これは天神橋六丁目の住まいミュージアムの中で祭りのしつらいをしたときのもの。幔幕のデザインなどかなりの調査をしてこのように飾りました。そもそも、まちの祭りと田舎の祭りの何が違うかというと、まちは独特の構造をしており、通りと町家という、非常に分かりやすいスペースをつくっています。八木も南北に十字路に交わる通りがあり、両側に町家があります。空間の構造が非常

にはっきりしている。演出にも要素があって、行列や、京都の祇園祭では山鉦など、つくりものもあります。このようなつくりものがあると、このようなスペースができるのだと思います。

通りと町家

行列だけではなくて、祭りのときに町家が幔幕や屏風で飾られている。江戸時代や中世の終わりから町家は飾られる習慣がありました。これも良く言われていることなのですが、町家の特徴的は、通りに面して立っていることです。家の内と家の外がなんとなく一体化して祭りができます。それにはいろいろな方法があります。家の前に提灯をかけておくだけでも、家と内と外の関連づけができます。このおうち祭りのために演出しているのだとわかります。最近増えているのは、窓際にちょっと花を飾るなど。そんなことで、自分の家と祭りが関連付けられる、様々な演出があります。町家が通りに面しているということから、家の内と外をつなげるいろんな方法が見いだせる。格子戸をあける、格子戸をはずす、軒下につるす、などいろいろなことがあります。

祇園祭の屏風飾り

京都の祇園祭の屏風飾りはこの写真のように、奥に緑が見えていますよね、欄間があります。間口が狭く、奥行きが長いという寝床と言われている敷地、この町家の形を活かして、本来ふすまが入っているのをはずし、続き間として使って奥行感を演出しています。八木も裏手にすばらしいお庭がある家が多いですけど、母屋の裏手の緑を上手に活かした演出と言えます。これは町家の形を上手に利用した飾り付けといえます。図面を出します。間口が狭く奥行きの長い京都の典型的な町家ですね。奥行きを活かすように屏風を立て並べ、ふすまを全部取っ払うことで続き間として使える特徴を活かしています。それから、通りに対して大戸口を開けますと、家の中が良く見えます。つ

まり、通りからも良く見えるというのは、京都の町家の一つの特徴です。

通りの空間に目を移すと、真中に通りがあって両側に町家を取り囲んでいる。このような町の構造は八木も同じですが、通りの空間を上手に活かして、通りの両側と山鉦のある通りが一体化された演出になると思います。



大津祭

各地の例を見ます。大津は祇園祭によく似ているのですが、みんな2階から祭りを見えています。2階の高さでからくり人形が動き、そこで皆楽しげに交流されています。京都の祇園祭では1階が中心ですけれども、大津は2階です。2階にわざわざこのような席を作っています。屏風を立てまわしたりして、このような感じです。大津も全部図面を出すという感じなんです。2階がこんな感じになっています。町家を見慣れている者からすると、不思議な形の町家だと思います。2階が高いのはいいのですが、この妙な窓の大きさが、すご

く不思議な感じですよ。

こちらは開口部が非常に大きくとってあって、2階の表側の背の高い町家です。明らかに通りに対して演出性があります。そして、このところに、小さな釣り床を作って簡単な床の間飾りをしています。たいてい町家では2階座敷は奥側に作ります。八木の場合も何軒か拝見しましたが、やはり奥にあるんです。ところが大津の場合は無理やり表につくっています。祭りのときに屏風が並べるといふことと明らかに関係があると考えています。スケッチを描くと良く分かります。

最近大津も町中の建物が建て替わってきています。建て替わっているのだけれども、祭りを楽しみたいからこんなふうになっています。去年と一昨年調査をしました。1997年にも調査をしまして、最近建て替わった家はどうなっているのかを全部見てみました。全部図面をとって、また10年後に比較しようとおもっています。この十年でも、飾り付けがだんだん簡略化されてきています。どの家も祭りの時のイメージを持って、建て替えられています。

皆祭りが好きですね。みえがかりを重視する人もいます。伝統的な祭りに対する関心が低くなっているわけではありません。建て替えの時の計画にその気持ちが出るのではないのでしょうか。建替えるときに、祭りに対しての意識と、街並み景観の発展があるのかと思います。

日野祭

似たような例ですが、滋賀県の日野では、こんな感じですよ。これは、祭りの日に、母屋と塀の間に棧敷を作って、塀に開いている窓越しに巡行を見る、というものです。町家との違いは、通りに面していないことです。もともとたくさんあったのですが、やらなくなったのを復活しているお宅があります。通りに面した塀に窓を開けるか開けないのか、だんだん開けてく家が増えています。全部の家を調べました。



これは棧敷窓の開放状況です。96年から99年の間に調査しました。建て替えた家にもあります。この住宅は駐車場のためにセットバックしましたが、ここにちゃんと窓をつけて、祭りのときに見えるようにしています。これはまた別の例です。正面からの図面はないのですが、建て替え前は通りに塀があったのですが、駐車スペースが欲しいので、祭りの時にはここを開けて、…これでもまださみしいですけども。建て替えの時に新しく作ることが多いですね。また、塀に穴が開いてなかった家も、わざわざ塀を建てて窓を開ける家が多いです。大津の人もこの窓を使うのは一年に一回なんです。塀だけ作って中との関係は何もない家もあります。

大津と日野

大津と日野の共通したところは、祭りの影響がそれぞれの住居の形態、つまり明らかに祭りのために窓を作ったり座敷を作ったりしているから、祭りのためのカタチが出来ていて、それが地域の特徴につながっていると言えます。建築のカタチや町家のカタチをかんがえると時には、北風がこの地域は厳しいからとか、日常的な機能のためにカタチやまちなみの特徴ができると思いがちですが、非日常性なお祭りのためにわざわざ窓を作ったり座敷を作ったりしたものが存在しています。非日常的な営みが日常に関係していることは非常に大事なことでないかと、調べているときに分かり

ました。意外と非日常の行事が非常に大事なのかもしれません。

祭りを嫌いな人はいません。維持するのにお金がかかると、かならず文句は言っています。しかし、皆祭りが好きなのです。祭りともちなみが関係あるのなら、祭りへの思いが町並や建物保存に役立っていけばいいのと思います。古い家を建て替える人も、窓にこだわっているなど応援してあげたりする方法がないかな、と思います。

富山城端【じょうはな】

別の例です。北陸地方の富山県の城端を調査しました。飾りがカッコいいですね。小さな町で観光客もあまり来ない地域です。城端は 6 ヶ町しかない小さな町です。祭りの飾りが当番制になっていて、ご高齢の方の目が厳しいのでちゃんと用意しなければなりません。

図を見てください。ここに欄間があるのですが、祭りの時には当然あるはずの敷居がありません。ここに押入れがありますが、祭りの時にはありません。祭りのときに押入れがはずせるようになっています。玄関の間口は狭くなっているのですが、ふすまをはずして、部屋が一直線になるように玄関の土間の上に板を貼るようになっています。祭りの日にわざわざ畳を敷くために床上げをしています。この行事は 60 年に 1 回しかなく、この祭りのためにこのような設えのある住宅を作らなくてはいけないという共通の意識があります。

このような、まちなみをつくれる家ばかり立つこととなります。またこのようなことが出来るような大工技術も継承されていきます。欄間にこだわっている家は御神体と欄間の絵柄を関連付けたいということで、家が建ってから良い欄間が出るまで待つこともあります。

このように、地域の伝統技術と町家のカタチが一致しているということです。祭礼の空間演出というのは建物の形だけに影響しているだけでなく、地域の建物の更新、つまり建物が建て替わって

くときに祭りということを意識させている、つまり皆がそれを意識して建物が建て替わっていくことによって、自然と特徴のある町並が構成されていく、と私は思います。

奈良井

最後の例なのですが、これは奈良井です。町家はどんどん変わっていきます。まちなみ保存と祭礼のことについて考えた時期がありまして、調べました。日常的な空間がどうなっているのかを調べました。これは、町内、町全体の単位と、それぞれの町家がどんな形をしているのかを調べたものです。町全体に非日常的な提灯や幔幕がどのように分布しているのかを全部図面に落としてみよう、基礎作業をします。外部空間がどんなふうに使われているのかを図面に落としていく。また、町家レベルでの祭礼の様々な方法や場所や印象を図面に落としていく、という作業をしていきました。図面にしてしまっただけでは、空間をイメージできないという点があるので、スケッチを描いてイメージします。

奈良井宿には 191 軒の町家があり、提灯がかかっていて、すだれがかかっています。ヒアリングした家は 8 割です。ほとんどの家が同じしつらえをしているすごい町です。

今まで紹介した家、例えば祇園祭で屏風飾りをしている家は全体の 1 割、大津祭りで 30 パーセントくらいです。日野でもそのくらい。奈良井は 8 割くらいがやっていますから、ほとんどの家が同じようなしつらえをしているすごい町なんです。

奈良井では日常的にはこのようなまちなみがありますが、おみこしの巡行の前はどの家も簾をおろしまして、提灯がさげてあります。おみこしがつきますと、全部簾が開いて、おむかえをするというわかりやすい構造です。

町並みも全部調査していきました。結界のところに高灯籠があり、すだれと提灯があり、おみこしがどこにあるかといった分布図を書いていきます

と、町のいろいろな行事と町の構造との関係がよくわかります。獅子屋台というものがあります。ライオンですね。何故か、中山道沿いにはライオンを曳くところと、象を曳くところがあるのです。江戸時代からライオンです。ライオンも象も江戸時代に将軍に献上うるために、中山道を通ったという記録があるのです。それと関係あるのではないかという人もいます。その時、ライオンを見た衝撃がお祭りになったのではないかという話もあります。

通りを神社からまっすぐ行き、それでまたこの神社にもどっていきます。おみこしは必ず通りに面したこの部屋で正座しておむかえします。やってきた若い衆に、どの家でも1軒1軒料理をだしてもてなさなければならぬのですが、実はもてなされるほうが大変で100何軒でもてなされるわけですから、ペースを考えながらお酒をのまないと、みんな最後はたおれてしまいます。

図面にしますと簾がかかって、提灯があって、おみこしがきますと簾と提灯がはずされて、バーンと開いてこうなる。そして若い衆のもてなしがこの奥の土間、通り庭でおこなわれる。これが伝統的なかたちだったようです。

日野では、こういう空間ができあがっているのです。建物も変化していきます。たとえば土間も玄関に変わりますと、通り庭が邪魔だから床を張ったりします。そうすると若い衆をもてなす場所が変わる訳です。店舗が多いのですが、店の間を撤去するとこんなかんじになります。中庭をもうけて、さらに2階にあがる階段を確保します。こうゆうところに板間ができて、このように若い衆をもてなす空間が定型化しています。この町は町並み保存地区ですから、大きく変わることはありませんが、床を貼る等して内部を改装する時でも、おみこしをおむかえして接待をできるスペースを確保しているのです。このような建て替え事例はよく見られます。

伝統的建造物群保存地区

伝統的建造物群保存地区制度では通りに面した第一室をできるだけ残してくださいということがあります。町並み保存にもいろいろな考えがあって、外側だけ残そうという考えがあります。しかしやはり、通りに面した第一室はできるだけ形を残しましょう、まちなみといってもただ表側だけではなくて、正面を開け放った時の形とかいろいろな通りとの関係も大事だから、そういったことをルール化しているところも多いのです。たとえば奈良井宿とか徳島県脇町とかです。

通りに面した第一室、つまりお祭りの時に使う部屋を、基本的に残そうというルールにしています。ただ、当然家の中を改造していきますと、店の間を撤去してこの土間にし、店舗にすることもありますし、内部改造もおこなわれていくわけです。部屋の独立性、開放性という話と、通りの第一室の形を残したいというまちなみ保存の意識がバッティングする部分がでてきます。そのようなことが、奈良井の場合は不思議なことにあまりなく、事前協議の時にこのようなことが議論になったことがないということでした。やはりこの町に住んでいる人が、通りの第一室がこうあるべきだと思っている人がほとんどだということが、アンケート結果でも明らかになっています。まちなみ保存のルールとして行う以前に、通りの第一室はああいうものだと思っており、閉鎖的にして通りから見えなくするということは考えていない。つまり、町並み保存の制度と住んでいる人の考えがバッティングしないということがあるのです。

長野藪原【やぶはら】

奈良井の隣町に藪原というところがあります。藪原では町家がどんどん建て替わっています。奈良井と行事やもてなす行為も同じです。ところが、家が建て替わっていて、おもてなしをする場所も、家の玄関でやる家、もっと中に入ってもらってやる家と、わかれてきています。建物が閉鎖的な

ってしまっています。どこの町並みでも同じですが、どんどん通りと家との関係が稀薄になってきています。藪原では通り側に厚い壁をたてていますが、奈良井の場合は掃き出しの窓があり、前面が解放できるようになっています。藪原ももとはそうだったのですが、今では腰窓が開いているだけ、格子も無くなって、窓が開いているだけの町並みです。そうすると、祭礼の演出が出来なくなってしまいます。もてなしも閉鎖的になります。すると、町並みの連続性も崩れ、町はさらに閉鎖的になり、祭りもどんどん縮小化していくという悪循環になっているのです。

妻籠と奈良井

妻籠の場合少しちがいます。これは時間がなくてスキップして説明します。妻籠の町家は奈良井とはちょっと違います。ダイという部屋があります。奈良井にはこれがありません。この奥が妻籠の居室空間になります。縁のような部分があつてこれをゼヒとよんでいます。これが妻籠の特徴です。妻籠では、ほとんどの祭礼行事がダイという部分で行われています。ここから内側はあんまり関係ありません。ダイに座ってお迎えをし、しつらいもここだけで、提灯などの演出もここだけなのです。大変シンプルです。ダイの奥で宴会します。奈良井宿では奥の部屋の全面使っていましたが、妻籠の場合はダイというスペースがありますので、そこが外向きの部屋ということになります。ダイの外ではこういった行事が行われていて、分割されているのです。

町並み保存もダイの部分までのこしましようと言われており、祭りとのきはおつかおうと努力されています。ダイの機能は何でしょうか。妻籠は他の宿場に比べて、圧倒的に観光客が多いのです。とにかく山のようにこられているのです。そのような時に伝統的なスペースを分節するため、ダイの奥は徹底的にプライバシーを確保し、その奥を閉鎖的にするということが行われています。

奈良井と藪原を比較しますと、奈良井の場合は暮らしの部分の意識と、制度としての伝統的建造物保存の両方あり、これらがうまくミックスされて祭礼空間をつくっています。藪原の場合は、空間と祭りに対する意識が大分違っていて、そのあたりが対比的でもあります。

奈良井と妻籠を比較しますと、妻籠の部分はどちらかというと空間分節を活用してプライベートの部分のわけて、できるだけ機能的にやっというところが町並みをみていてもよく読み取れるのではないのでしょうか。

木曽十一宿の代表地区をみますと、様々な祭礼時の伝統があり、町家の空間構成もたいへん影響し合っていることがよくわかりました。特に奈良井と妻籠の意識・無意識は別として、祭り行事が大事だという思いが実は街並みを保存するということとうまくリンクしているということです。つまり全く矛盾しない形で継承されているということがいえるとおもいます。やっぱりどうしても町並み保存をやっていく上では、生活上の問題と機能と、それから利便性と町並みの形を残すことが相反する場合があります。上手に伝統的なスペース使っていく知恵が、祭りのなかから読み取れるのではないかと思います。やはりみんな祭りが好きですし、お祭りのときならば贅沢なことをやりたいとか、厳かにやりたいとか伝統的な形を残したいとか、みなさんそれぞれの思いがあります。古い町家の形は、それを上手に利用してやってきた伝統があります。上手に使えるようなスペースをそれぞれの町家が持っているとしたら、町並みに対する思いと祭りに対する思いはリンクしているところがあるのではないかと考えるわけです。

八尾【やつお】「おわら風の盆」

最後の例です。これは「おわら風の盆」で有名なまち八尾（やつお）です。私もこの調査をやろうと、福井大におられた碓田智子さんに相談してみたのですが、「人が多くて調査絶対無理ですよ」と

言われました。行ってみたのですが、やはり調査は無理でした。余地がないぐらい人が多いのです。私は踊りに全く興味がなくて、何がおもしろいのかかわからないのですが、この踊りを見る人たちが大変な数なのです。もともと町内で踊っていたのですが、見に来る人が増えたのです。八尾は祭りで有名なだけでなく、富山の伝統的な民家の形を大事にしようという取り組みをしています。八尾型住宅と名付けています。これは伝統的な住宅で、こちらが新しい住宅です。これらがどんどん建っています。建築の専門の方は一度行ってみたら良いと思いますが、木造伝統建築、新町家のデザインカタログみたいになっています。細かい装飾があり、屋台づくりありですごいですね。富山県出身の学生は、「わたしちょっと恥ずかしいくてあんまり案内できないんです」と行っていました。様々なタイプがあって楽しいのですが、ガイドラインがあり、町家型住宅は2階に手すりつけなさい、と書いてある。風の盆の時は人が多くて動けなくなるので、2階から見る人がたくさんいて、危ないから手すり付けろというのが、一つのスタイルになりつつあるのです。そのデザインが洗練されているかどうかは微妙ですが、デザインに特徴を持たせようと言うのはよくわかります。

祭りと観光

次は、祭りは観光化と直接結びついているという例です。このように施設を充実させていくわけです。祭りで町づくりをやるという時に、投資しやすいのは施設なのです。

今回歴史まちづくり法ができ、私もいくつかの町で歴史まちづくりのお手伝いさせてもらうことができましたが、歴史的風致っていう概念があって、文化財を中心としたエリアを設定するとき、その地域の人たちの伝統的な活動が行われていますが、これらに対し助成していきましようということです。その活動の最たるものが祭りなのです。

たとえば先行的な地域で、実験的な取り組みをし

たのが高山祭です。高山の町並みその周辺は、高山の屋台が巡行するところで、街並みと曳山祭りが一体化した歴史的な風致がつくられているということをいっています。それを積極的に補助していきましようというのが、歴史まちづくり法の趣旨ですね。

私も少し前に歴史まちづくり法に取り組んである市町村が集まる会合で話をさせてもらいましたが、疑問に思ったのが、祭りを助成して援助していくということと、町並みを保存していくということはどうも別メニューになっているということです。地域団体とか、祭りを活性化していこうというためのお金と、町並み保存のお金は当然別なのです。祭りを元気にしていくための団体の施設をつくりましよう、曳山を収納するための建物をつくりましようということで、そういうところにお金が落ちるようになっていきます。法律の趣旨が、高山祭がおこなわれている行事と町並みを一緒になって残していこうというものであれば、それをどう関係づけていくかっていうところにアイデアをださなければなりません。祭りは祭り、町並みは町並みとなっていくことが心配なのです。額が大きいだけに……。宿泊施設も考えておられて、そういった公共施設みたいなものも、伝統的な意匠で伝統的な行事の中どのように使われるかに配慮して建てようという努力はされているとは思いますが。

しかし、この地域の伝統的な祭りの特徴は何か、建物をどのように使っているかということを検証せずに建てられた場合、和風だけどその場所の特徴が無い建物ばかりが増えていく可能性を危惧しています。歴史まちづくりをやっておられる高山はしっかりしたデザイナーがいてよいのですが。なんとなく、祭りをやっていたら、お金が来ました。じゃあ、曳山会館を建てましようとなり、高い投資をすると無個性な建物ばかりが建ってしまう可能性があります。高い投資しますとなんとなく無個性な建物ものばかりが建ってしまうという可

能性があるという気がします。

八尾の場合は、風の盆のときにどのように使うか、あるいは伝統的な町家の意匠をどのようにしてこのような施設に写すという問題です。長押やおおきな軒の部分などは伝統的な意匠から転用していますが、このような不思議な建物がたくさん建っています。悪いことではないのですが、ちょっとデザインを考えてほしいと思います。

いま祭りが注目されており、祭りを援助しようとか、祭りで頑張ってもらおうとか、祭りをきっかけに町づくりしていこうということは地域の皆さんも意識しています。このような動きをサポートして行くような行政的なメニューも増えているように思います。ただそれを運用していく時には、地域で祭りがどのように行われていて、どのような特徴をもっているか、地になる町並みとか建物とどのような関係を持っており、どのような影響を与えあっているのかを町の方々それぞれが意識して行く必要があると思います。ちょっと教科書っぽい言い方になりますが、大事なところがなくなり、なんとなく町のための良い建物ができたねといって、御しまいになるところがあると思います。

八尾でも伝統的な行事の構造が変わりつつあるような気がします。つまりもともと通りと家の関係は結びついたものがあったのですが、今はもう観光客が多くなったので、その人たちをあっちこちに拡散さ背無ければ行けないとか、2階に観覧席づくりましょうとか、公共施設のまえにステージづくりましょうと言う方に力が入って、あまりに町の容量を超えた人が入ってきてしまったので、伝統的ないいところが失われてしまっているような気がします。

祭りのしつらいと町の活性化

話を戻しますが、祭りのしつらいと町の活性化について紹介します。これは古い行事ではありませんが、お人形飾りや屏風飾りが全国展開になって

きています。これは福岡県八女市です。これは越後の屏風祭り、これは倉敷の屏風祭り。伝統的な町並みをいかし、人形飾りなどを使用という、スペースを生かしたまちづくりには古いものも、新しいものもあり、とても増えてきています。

越後村上はとても良かったですね。始められた頃に一度拝見し、また5年後に拝見しましたが、かわっていたことは、例えば屏風飾りの説明をするために美術の勉強をする会ができたり、屏風祭りで人を家に招き入れたら、家をほめられたので、自分の家のことを勉強したりと、どんどん派生していくのです。立派なお家ですねっていう話になると、家の歴史を調べて、自分の家の自慢するのです。

実は自分の家を自慢するのは難しいことで、ある程度知識がなかったら自慢できないのですが、次の動きには制して行くのです。このような動きが具体的になってくると、大阪市平野が良い例です。HOPE ゾーンで、いっしょにガイドラインをつくったときに、地元の方が、祭り提灯が似合う町並みにしたというスローガンをつくるとおっしゃった。「フラットなファサード、つまりつるつとした表構えのビルには、提灯がかかりませんですよっ」ということです。庇があったら提灯釣れますという訳です。

あほみたいな話ですが、街並みの本質についています。

平野ではどんどん新しいマンションやビルが建っていき、それは全体的な町並みの調和をくずしている。そのようなときに、庇が一本ビルに入っているだけでずっと建物もスケールダウンする、ということ提灯を通じておっしゃっているんですね。現に新しいマンションにかけあいにいって、提灯を釣れるようなスペース作られたりしておられますので、すごくおもしろいと思います。

滋賀県の日野町では、塀作ったら助成金出すというようになってきました。

ところが、富山県の城端の事例を紹介しましょう。

町並みをつくるために家を造ろうとしてどうなったか。こんなことになっちゃったんですよ。6つの町内がありましたが、そのうち3つの町内が道路拡幅をして、こんなになってしまいました。ということは、先ほど紹介したようなことがみられる町家がもう建たないのです。つまり敷居をはがして、続き間にして行いう飾りが、この拡幅された6ヶ町ではもうできないのです。じゃあどこでやるのかというと、公民館でします、あるいは共用の集会でしますということになりました。

道路が広がって景観がかわっただけではなくて、その地域で祭りを維持した工法とか伝統法をいかした町並みを作り出してきた、しくみそのものがなくなってしまったのです。拡幅しなかった町内は当初はたいへん残念がっておられました。3町だけ道が広がってうちはあかんかったと。しかし道が広がったあとをみて、広がらなくてよかったと言うてられます。道が実現したら、そんなによいものではなかった。やはり広がらなくてよかったとおっしゃっていました。

祭と街並み

ここでまとめます。大津で申し上げたのはやはり祭りはみんな好き。ですから、2階からみんなが見ている訳です。しかし建物の外観が町並み景観に結びつくかといえ、そうではない。こういう町は、ちょっとしたルールや方向性を示すことによって、町並みがぐっと良くなって行くと思います。

日野はもっとデザインが洗練されなければならないと思うのですが、価値観の共有が具体的な整備に結びついているということです。板塀をたててそこに窓をあけるという非常にわかりやすい目標があるからなのです。つまり景観整備の目標と祭り意識が一体化しています。具体的な目標がすごくわかりやすい。板塀を立てるだけです。平野もそうです。庇つくるだけでいい。

城端は、祭りが町並みを形成するしくみに結びつ

いています。

奈良井は、価値観が建物の形を具体的に残すということに結びついています。

八尾の評価は、無理矢理書いたのですが、町に特化した設備はよくなっています。建物のデザインについてはあまり述べません。

それぞれのまちに課題ありますが、祭りというものゝ町並みというものを考えたとき、さまざまな可能性があると思います。ちょっと話はそれますが、私はあちこちの祭りを見てきました。屏風祭りは、北前船に乗って下北半島まで伝わっています。北前船のルートの上に、京都の祇園祭と屏風祭りが分布しています。

下北半島のある漁村で、さっきまで漁船に乗っていた兄ちゃんが、家に屏風がざってこゝなあかんからといって家で花を生けている。こんな広がりがあります。まち柄、むら柄がでると思います。村柄という言葉があるかどうか分かりませんが。祭りは地である家並みで決まります。八木なんかは立派な地をもっています。地がないとこは、一生懸命考えなければなりません。

ですから、御堂筋パレードのようなことを考えなければなりません。御堂筋は図として、かついいですけどね。何もないまちに何か作ろうと一生懸命頑張っておられます。それはしんどいことです。

祭りのしつらいは、町並みを修復していきます。たとえば京都祇園祭の時に道を歩いていると、空家や空賃がいっぱいあります。でもそれを様々な演出でうまいことかくしてられます。このような、一時的な修復効果は明らかです。

祭で町並み修復

日常的なことですと、空き家利用や、古くなっているファサードを直してみようというムーブメントにつながります。これ明らかに修復効果があります。祭りのときのしつらえを通して、自分の町にどんな特徴があるのか、どんな資産があるのか

ということを知り見直すことが大事です。このような部分を祭りで使おうというように、祭りも変わっているのですから、面白いネタをうまく組み込んで行くのです。

また、祭りは家を見直すよい機会となります。祭りの時、幔幕や提灯かけるとき、自分の家を見ます。どのようにかけたら格好いいかというように、自分の家を見るという効果があります。祭りは家と通りを結びつけます。

最後に、祭りはみんな好きなのです。それを具体的な目標とちょっと結びつけることができれば、それはまちづくりや景観整備つながって行くと思います。八木に特化した話は出来ませんでした、愛宕さんの空間はとても面白いです。祠が通りに出てくるというようなことです。あれも通りがあるから出来ることです。

祭りでみんなが盛り上がるというソフトの効果はありますが、次にはハード効果を考えてほしい、そんなとき平田家などいくつかの登録文化財になっているお宅を上手につないでいくことによって、町並みを見直されたらと思います。新しい方向付けが出来ればと期待を持っています。どうもありがとうございました。

質問

いつもお世話になっております。平田家の調査もして下さった先生のことですので、八木の町のことはよくご存知だと思います。今薦が絡まった状態の平田家はこれからどんどんよくなっていくと思いますが、指定文化財が町を良くする起爆剤の1つになる建物だと思います。平田家についての先生のお考えを聞かせてください。

答え

今日の話に関連させて話しますと、私は、八木は今井とは全ちがう町だという第一印象を持っています。町並みもちがう。やはり歴史的にライバル関係にあったのだらうと思います。ですから、八

木は八木のいき方があります。そのとき核になるのが橿原市指定文化財として平田家だと思います。登録文化財は持ち主に負担はかかりませんが、平田家の場合心よく提供して下さった持ち主の方にも、指定文化財にしてくださった方にもお返しをしなければならない。最初に杉本教授の話をしましたが、せつかく町の核になる施設を提供して下さった持ち主の方に対し、町全体がそれに応えてその建物にふさわしくなっているということが大切です。あまり比較しては行けないですが、やはり登録文化財と指定文化財は活用と保存のモデルだと思います。



文化財は社会的な役割としてモデル的になっていかなければならない、きちんと町並み保存の核になる、このようにきちんとするとこのように使えますというモデルだと思います。登録文化財のお宅、オオバさんも意識高い方で手放されたと思います。平田家の場合は指定文化財になったということで、きちっとした保存整備が大事だと思います。ただその一方で、その本来の形を大切にしながら、このように使えるという提案をすることによって、他の一般的な町家をお持ちの方を勇気づけたり、アイデアを提供する役割を平田家は果たさなくてはなりません。

そのような時に、今日お話ししたように、日常的にはある拠点になるとは思いますが、建物を使って何か楽しいイベントをやってみるといふときに、祭礼をうまく取り入れるというモデルになると思

います。こんなにきれいに見える、土間との段差はこうやって使うと面白い。そういう見本になることができればいいですね。伝統行事には多くのヒントが隠されています。非日常的な伝統的行事は、自分の家を見直すチャンスです。日常的に使っていると何気ないですが、祭りのときにちょっと幔幕を吊るしてみると格好いいとか、花を飾ると通りからみてとても格好いいとか。そういうアイデアが出来たらなあと思います。

ペナンの先生の言葉

比較文化を専門にしていますので、文化の多様性や形態に興味を持ちました。町を評価するには、ハードアイとソフトアイの両方から考えて行かなければなりません。民俗学や他分野でも同様です。ご講演は、マレーシアの文化を評価していく上でもたいへん参考になりました。

質問

引っ越してきて初めて祭りがあることを知ったという新しい居住者の方々がいらっしゃいます。こういった新しく入ってこられた方たちと祭りの関係がうまくいっている例があれば教えてください。

答え

難しいですね。これは、残念ながらうまくいった例のほうが圧倒的に少ないと思います。祭りは伝統行事なので、閉鎖的なところ、身分とか因習とかにかかわっている要素が強くて、祇園祭も身分や因習が巡行しているようなものです。私は、大きく変えることで変えなあかん部分と残していかなければならない部分があると思うのです。

たとえば女性が鉾に上るのは強固に拒んでおられる。そこには拍手を送っています。このような、閉じた部分があってもいい。しかし、もともと都市の祭礼は、かなりオープンなところもつくってあります。本来は、伝統的な仕組みの中に、他所からはいてこられた方が地域の中にとけこむ仕組みを

必ず持っていたのです。最初に会長さんのところに挨拶に行く、儀礼を通して町に入っていく、そのために町内会もある訳です。区役所に届けて、住民票を移すだけで町に入ってしまうのではありません。

どの地域社会も新しい人を受け入れないというときにはそれなりの儀礼を経ていたはずですが。赤ちゃんの公園デビューというものがありますね。最近団塊の世代の方が町に戻ってこられて、町づくりに参加するのに、いきなり入ってきて頑張られると、周りがストライキを起こすということもあります。団塊の世代の人たちはまちづくりデビューすべきだと思います。まちを離れていて、40年くらいして帰ってきた、なかなか難しいですが。イベントのとき等に新しい人に役割を与える仕組みを積極的につくっていくべきだと思います。

例をあげると、京都の祇園祭の太子山町で祇園祭はとても排他的だったのですが、新築ワンルームマンションの居住者をごそっと祭りの協賛会に入れてしまっ、強制的に参加してもらっている例があります。最初嫌がっている人が半数ぐらいいたのですが、今ほとんどの方が喜んで参加してられて、太子町にすんでいることを自慢しておられるということも聞きました。受け入れ側が、新しい人が入っていく仕組みをつくってあげないと、おそらく新しい人が入っていくことは不可能だと思うんです。今井はそれを NPO で組織的に取り組まれようとしています。今井の動きはいい例になると思います。